

---

## 曲目紹介

---

### 1. 裸の島：林 光（1931 - 2012）〈編曲・野田雅巳〉

作曲家“林 光”は、現在の東京都新宿区神楽坂に生まれ、9歳の頃より父の親友である尾高尚忠に師事し、少年ながらも室内楽作品、管弦楽作品など大人顔負けの作品を多く作曲しました。器楽曲の作曲と並行して日本語によるオペラにも早くから取り組み、『裸の王様』（1955年）、『あまんじゃくとうりこひめ』（1958）、『絵姿女房』（1961）を次々発表し、この分野で名声を博しています。著書にも、『日本オペラの夢』、『音楽の学校』など多数あり、主要作品に解説を付した『林光の音楽』（2008）が刊行されています。

『裸の島』は、1960年（昭和35年）11月23日に公開された、新藤兼人監督・脚本による日本映画です。孤島で自給自足の生活を行う4人の家族の葛藤を、台詞を排して映像美を追求することで傑作と称される域に高めたものとなっています。

### 2. 幻想曲とフーガ ト短調 BWV542：J. S. バッハ（1685 - 1750）〈編曲・御喜美江〉

バッハのオルガン曲を代表する最大傑作のひとつです。

#### 2-1. 幻想曲

幻想曲はヴァイマル時代には既に作曲されていると考えられ、即興的な性格が強く、半音階的な転調が特徴となっています。

#### 2-2. フーガ

フーガは1720年にハンブルクで作曲されたと考えられており、“複数の声部(パート)が調和を取りながら重ねていく”という厳格な対位法で書かれています。当時よく知られたオランダの民謡からとられたテーマが用いられ、作品に示された大胆な独創性は、バッハの作品中でも特にユニークなものとして注目を集めています。



### 3. ホルベルク組曲 Op. 40：E. グリーグ（1843 - 1907）〈編曲・内田祥子〉

原曲は1884年に書かれたピアノ独奏曲ですが、今日ではグリーグ自身が1885年に編曲した弦楽合奏版の方が広く知られています。ホルベア（ホルベルク）とは「デンマーク文学の父」とも呼ばれるルズヴィ・ホルベア（1684 - 1754）を指し、この同郷の先人を記念する祝祭のために作曲されました。ピアノ版が軽いタッチの爽やかな印象を与えるのに対し、弦楽合奏版は非常に音響的に豊かな作品に仕上げられています。

#### 3-1. 前奏曲 Allegro vivace ト長調

バロックの組曲のスタイルに倣ったため前奏曲が置かれ、よりバロックらしくリズムカルな印象を与える編曲が行われています。

#### 3-2. サラバンド Andante espressivo ト長調

前奏曲とは対照的に穏やかな舞曲であり、弦楽合奏版では中間部でチェロのソロが入っています。

3-3. ガヴオットとミュゼット Allegretto-Poco piu mosso ト長調→ハ長調→ト長調  
フランスの2つの舞曲のスタイルを組み合わせていて、ミュゼットならではのバグパイプ独特のドローン音が表現されています。

3-4. アリア Andante religioso ト短調  
バロック時代の先人達に倣ってはいるものの、そのほの暗く、時には熱っぽい曲調にはグリーグの個性が強く発揮されています。

3-5. リゴードン Allegro con brio ト長調→ト短調→ト長調  
前の曲とは対照的に、いかにもバロック的な明るい舞曲であり、弦楽合奏版では各パートのソロの重奏が他のメンバーのピチカートの伴奏に乗って印象的に使用されています。

— 休 憩 —

4. エコー：A. クシャノフスキー (1951 - 1990)

ポーランドの現代音楽界において、作曲家として、アコーディオン奏者として、そして教師として必要な位置を占める音楽家です。アコーディオンのための作品を多数作曲しており、その新しい表現方法を開拓したことで知られ、“アコーディオンのショパン”と称されることもあります。

“エコー”はその名の通り、“こだま”のように会場内に響き渡ることでしょう。

5. スラヴ舞曲より：A. ドヴォルザーク (1841 - 1904)

もとはピアノ連弾のために書かれましたが、作曲者自身によって全曲が管弦楽編曲されています。それぞれ8曲からなる第1集作品46と第2集作品72が存在します。

5-1. 第2集 作品72 第2番 アレグレット・グラツィオーソ ホ短調

第2集ではチェコの舞曲は少数にとどめ、他のスラヴ地域の舞曲を取り入れているのが特色となっています。



5-2. 第1集 作品46 第8番 プレスト ト短調

第1集ではボヘミアの民族舞曲のリズムや特徴を生かしつつも、旋律は独自に作曲されています。



6. スペイン舞曲 Op. 12 より：M. モシユコフスキ (1854 - 1925)

ポーランド出身のユダヤ系作曲家、指揮者ですが、1873年に初めてピアニストとして成功を収め、まもなく近隣の都市を巡演して経験を積むと同時に名を揚げて行きます。その2年後には、マチネで自作のピアノ協奏曲をフランツ・リストと共に聴衆を前に演奏しています。その頃、1876年にピアノ連弾のために作曲され、後に管弦楽に編曲されました。

6-1. 第1曲

6-2. 第3曲

6-3. 第5曲

## 7. A. ピアソラ (1921 - 1992)

アルゼンチン出身のタンゴ音楽作曲家、バンドネオン奏者です。クラシック、ジャズの要素を融合させた独自の音楽形態となる新しいタンゴを創作し、幾多の名曲を残したことで知られています。

### 7-1. オブリビオン

1984年、イタリア映画『エンリコ4世』のために作曲されました。忘却という意味で、「あれほどに恋焦がれたあの人への想いであっても時間とともに薄れてしまう」その切なさが歌われています。ピアソラ独特の和声にのせてシンプルな美しいメロディとなっています。

### 7-2. Ave Maria

もともとは歌曲として作曲されていたようですが、同じく映画「エンリコ4世」のためにオーボエの曲として編曲されました。その時のタイトルは「Tanti Anni Prima (昔々)」でした。

### 7-3. エスクアロ (鮫)

1979年、ピアソラの晩年の五重奏団のヴァイオリン奏者スアレス・パスのために書いた作品で、タンゴ・ヴァイオリンの魅力にあふれた一曲となっています。曲のタイトルは、ピアソラの趣味であった「鮫釣り」から来ています。アルゼンチンでは小型のチョウザメなどを釣るのがポピュラーであり、スポーツのひとつとして広く親しまれていました。予測不可能な展開は、まさに先の読めない鮫の動きのよう。鮫釣りのスリルと躍動感が、野性味あふれるリズムとメロディによって見事に表現されています。

マスルカ C 大田 博之

### アコーディオンとバンドネオンの違い

バンドネオン (下図、右) の鍵盤は必ずボタン式。

ボタンの配列は不規則、同じボタンを押していても、蛇腹を引いた時と押し  
た時では違う音が鳴ります

アコーディオン (下図、左) の鍵盤はピアノのような鍵盤とボタン式と両者が  
あります。蛇腹を押した時と引いた時に出る音は同じです。

歴史はアコーディオンの方が古く、バンドネオンはアコーディオンから派生  
した楽器です。

